

ニュースレター

Hokkaido University
Institute for the Advancement of Higher Education

北海道大学 高等教育推進機構
Newsletter No. 99



新渡戸カレッジ授業「ボランティア」が開講しました

(10 ページ)

「IR ネットワーク報告書 2013」を発行しました

(11 ページ)

公開講座「アドバンスドランニング講習（1 期）」を
開催しました

(12 ページ)

特別講義「キャリアデザイン」開講

(14 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

CoSTEP10 年目の節目にあたって

高等教育推進機構 科学技術コミュニケーション教育研究部門長 松王 政浩

はじめに

これまで代表を務めてこられた杉山滋郎先生(現・北大特任教授, 北大名誉教授)の後を引き継いで、この4月から新たに CoSTEP 代表(科学技術コミュニケーション部門の部門長)となりました。今年は CoSTEP の活動が始まって 10 年目の節目に当たります。これまでの活動を総括しつつ、今後の新しい 5 年, 10 年の展望を示さなければならない年ですので、そのような節目の重みを大いに自覚しつつ、課せられた役割を果たしていきたいと思っております。

就任にあたり、ご挨拶を兼ねて、この稿では CoSTEP の活動内容をよりいっそう学内のみなさま

に知っていただくために、10 年の沿革、現状ならびに今後期待されることについて、簡単にご紹介したいと思います。

CoSTEP の 10 年

CoSTEP は 2005 年度から 2009 年度までの 5 年間、科学技術振興調整費による「新興分野人材養成」に係わる委託事業として、杉山代表の下に北大でスタートしました(2010 年度からは北大高等教育推進機構の一部門として、事業を継続しています)。

この2005年という年は、よく日本の科学（技術）コミュニケーション元年と言われます。この時期に北大以外にも東京大学、早稲田大学でそれぞれ科学コミュニケーションに関するプロジェクトがスタートしました（目的は少しずつ異なります）。

CoSTEPの事業目的は、当初から変わらず「科学技術コミュニケーター」を要請することにあります。これは狭義には、科学者と市民の間に立つファシリテーターのような人材を指しますが、CoSTEPの人材養成の意味には、科学に携わる人間が十分社会的視点をもち、自分の研究について責任をもって、わかりやすく社会に伝えることができる、ということも含まれています。こうした能力、技能は、今や分野を問わず、科学に携わる者すべてに要求されるようになってきました。こうした能力、技能が身につくような教育カリキュラムを提供することが、CoSTEPの目的であり、この10年の活動の中心です。カリキュラムは、科学と社会に係わる学内外講師による講義に加え、専門スタッフによるライティング、音声・映像、対話の場に関わる各実習を主な中身とし、平日の遅い時間と土曜日の「課外」時間に1年間にわたって提供されます。この10年間にはたとえば、地球温暖化問題や生物多様性保全問題などに関して、世界で同時に市民会議を行い政策決定者に意見を届けるWWViewsという科学コミュニケーションの世界的イベントなどもありましたが、CoSTEPは日本での開催の中心的な役割を果たし、こうしたイベント参加も教育に組み入れてきました。また、最近の取り組みであるfacebookの「いいね！hokudai」では、北大内の研究やイベントを紹介するという広報的要素も組み入れつつ、伝えることの重要性を、記事作成を通じて学ばせています（これは対外的にも大変反響の大きい取り組みの一つです）。

CoSTEPのこれまでの受講生のうち一番多いのは北大院生ですが、社会人受講生も少なからず含まれており、学生と社会人が一緒に学ぶオープンな学びの場であることも、教育上大きな意味を持ちます（またe-Learningを早くから導入したことにより、札幌以外の全国どこでも学べる仕組みになっており、地域を越えた交流ができることも特筆できる点です）。こうして昨年度までに550名あまりが課程を修了しました。課程修了は、決して「学位」と同等

のものではありません。しかし、受講生はそのことに非常に意味を感じてくれていますし、CoSTEPの修了生であることに対する社会的評価も少しずつ定着してきていると思われます。

またCoSTEPは独自カリキュラム以外に、大学院での科学コミュニケーション教育にも途中から携わるようになりました。加えて、教育以外に、学術誌『科学技術コミュニケーション』を発行し（現在第14号まで発行済み）、国内の関連研究者に貴重な研究発表の場として活用されています。

こうした10年の活動は徐々に社会に浸透し、広く評価されるようになってきました（たとえば教育の一環として紀伊國屋書店で開催しているサイエンスカフェはすでに70回を超え、地域市民にも広くその活動が浸透しています）。このたびそうした功績が認められ、CoSTEP運営の中心となってきた杉山滋郎氏、石村源生氏、大津珠子氏、三上直之氏の4名が、平成26年度科学技術分野の文部科学大臣表彰、科学技術賞を受賞されたことを併せて報告しておきます。

CoSTEPの現在

今年も多くの受講希望者の選考を経て、5月に新たな一年がスタートしました。今年は10周年に当たることから、通常のエデュケーション事業に加え、特別イベントが企画されています。一つは7月5日に修了生らを中心とした10周年の集いを行うということ。また、これに連動して10周年記念文集を発行する予定です。既に記念文集には、修了生、過去の講師の方々をはじめ多くの方々等から二百数十のメッセージが寄せられており、CoSTEPの活動の広がりを跡づける上で（また日本の科学技術コミュニケーション10年を振り返る上でも）貴重な資料になるものと思われます。このほか、北大オープンキャンパス開催時（8月4日）に、大学院教育として行っているセルフプロモーション授業の成果として、北大受験希望者に院生が自らの研究内容を紹介するというイベントも企画しています。

また、今年から始まった、新たな学内教育関連でのCoSTEPの取り組みとしては、北大Ambitiousリーダー育成プログラム（ALP）に対し、講義の一部を提供するということが挙げられます。今後こうした学内の他のプログラムとの連携がますます進む

ものと考えられます。

今後の展望

さて、今後 CoSTEP はどうあることが期待されるでしょうか。まず、次年度から CoSTEP は高等教育推進機構の「オープンエデュケーションセンター」の中核的組織と位置づけられることが決まっています。これは上に述べた ALP への協力のように学内での新たな教育プログラム等に対し、CoSTEP がこれまで蓄積してきた教育コンテンツや e-Learning 等のノウハウを提供することが期待されているためです（新たな共通教育素材、たとえば「研究倫理」教育コンテンツ開発などもそこに含める必要があるかもしれません）。加えて、同じく学

内への貢献として、各研究部門が行うアウトリーチ活動の補助のみならず、アウトリーチに関する学内の実践知を集約して（あるいは CoSTEP の学内人材ネットワークを活かして）今後の活動の効率化につなげる働きも期待されるだろうと考えます。その際、CEED や URA との連携、棲み分けについての協議も進めていく必要があります。

対外的にはサイエンスカフェ等個別イベントの継続に加え、JST 科学コミュニケーションセンターをはじめとした他の組織との知識共有（先日もその件で第一回の協議を行いました）、また科学コミュニケーションの学術体系を整理するための寄与が重要な課題になると思われます。

写真1 文部科学大臣表彰 科学技術受賞の報告。山口総長、新田機構長と



写真2 平成 26 年度 CoSTEP 開講式の様子。理学部大講堂

教育支援 EDUCATIONAL SUPPORT

TA 研修会開催される
—226 名が修了—

2014 年度の TA 研修会が、4 月 2 日（水）に機構の大講堂を主会場として開催されました。全学教育を担当する TA に対しては、当該授業科目の担当教員によるオリエンテーションのほかに、事前に当該業務に関する適切な研修が義務づけられています。本センターでは、平成 10 年度から TA 研修会を実施してきており、今回で 17 回目となります。今年度の全学教育における TA 採用人数は、のべ 1276 名（対前年度比 1.2% 減）です。のべ時間でも 2.3% 減少（37,488 時間）しています。TA 制度は広い意味の大学院教育の一環として導入された制度で、教育を学ぶための実地訓練（教育現場の体験）を行う制度ともみなされています。また、大学院学生は教員とともに学部教育に参加することによって、自分の専門についてより一層理解を深めるとともに、教育の現場において教えるとはどういうこと

かを理解することもできます。

研修の目的は以下のように要約されます。

- 1) 大学教育の基礎を理解する
- 2) 全学教育の趣旨を理解する：目的、意義、全体での位置づけ
- 3) 専門教育に還元できない基礎的な教育技術、心構え、教育理論について理解する
- 4) 担当する科目の内容と教授法を理解する
- 5) TA 相互の交流をはかる

午後の分科会は体育学を加え 15 分科会になりました。すべてを修了した参加者は 226 名でした。57 名は午前か午後の一方にしか参加できませんでした。

なお、今回配布されたテキスト「北海道大学ティーチング・アシスタント マニュアル第 3 版」は、今年度新たに改訂する予定です。

表 1 平成 26 年度北海道大学全学教育 TA 研修プログラム

〈午前の部〉司会 細川敏幸（高等教育推進機構） 9：30 挨拶 新田 孝彦 高等教育推進機構長 9：35 講演「北海道大学の全学教育について」 鈴木 久男 総合教育部長 10：05 講演「TA の Vision と Mission」 瀬名波 栄潤（文学研究科） 10：35 休憩（10 分） 10：45 「TA 業務に関する事務処理の内容」 土本 光一（教育推進課） 11：00 パネル討論「TA の業務と役割」 司会：山田 邦雅（高等教育推進機構） 教員パネリスト：細川 敏幸（高等教育推進機構） 小幡 宣和（法学研究科） 院生パネリスト：柴田 啓介（教育学院） 太田 崇明（理学院） 12：00 昼休み 12：00～12：30 コーヒーブレイク（TA 経験者との談話）	〈午後の部〉（時間は分科会によって異なる） 以下の 15 の分科会（A）～（O）に分かれて実施 （A）一般教育演習 （B）一般教育演習／フィールド （C）講義 （D）論文指導 （E）情報学 （F）英語Ⅱオンライン授業 （G）英語Ⅱ以外の英語の授業 （H）初習外国語（中国語以外） （I）中国語 （J）文系基礎科目 （K）心理学実験 （L）理系基礎科目 （M）自然科学実験 （N）体育学 （O）アカデミック・サポート
---	--

分科会の報告

AB 一般教育演習

一般教育演習／フィールドは、それぞれの授業で内容がばらばらなので、分科会の目標を、TA 同士で士気を高めること、また、一般教育演習でよく利用されるグループ学習を実際に体験し、その方法と

効果を把握することとして行いました。参加者は 34 名（内 4 名はフィールド）で、5 グループに分かれました。

まず初めに、一般教育演習の特徴と注意事項を説明し、グループ討論の意味と方法についてのレクチャーを行いました。特に、教員が一方的に話す講

義では、情報が上手く伝わらないこと、そして身にならないことを強調しました。

次に、実際にグループ学習を経験するため、「TAが実際に経験するかもしれない事例」をテーマにケーススタディを行いました。参加者は初めて教員側の立場から授業について深く討論を行い、新鮮さと同時にその重要性を実感している様子でした。

(山田 邦雅)

C 講義

分科会 C (講義) は、大講堂に集合しマニュアルを参考資料にして、細川のミニレクチャーにより TA 制度の歴史と意味、シラバスの読み方、講義の基礎手法を学びました。次に 40 名の参加者を 2 クラス 8 グループに分け、N283 は三上、飯田が、N282 は細川が担当し、グループ学習によるケーススタディを行いました。まず、アイスブレイキングによりグループ内の自己紹介と役割分担を確認し、「雪の使い方」でグループの動きを会得しました。次に「出欠を学生証のリーダーで確認している講義を担当した。学期の終わり近くになって、5 回目と 7 回目に出席したが学生証をかざすことを忘れたとの申し出が TA の菅君にあった。菅君はどうすべきか。」など、6 つの起こりうるケースのうちの一つについて、どう対応すべきかを議論しました。各グループとも熱心に課題に取り組み、最後の発表でも課題を一般化して対策を考えるなどしたわかりやすい解決策が提示され、有意義な研修となりました。

(細川 敏幸)

D 論文指導

まず、『TA 実践ガイドブック』(小笠原正明・西森敏之・瀬名波栄潤 編, 玉川大学出版, 2006 年)を使用し、論文の種類や執筆指導の注意点を紹介しました。その際に、教員と学生の中継役として、TA の添削・評価への関わり方も説明しました。

次に、本学『平成 26 年度北海道大学全学教育の科目実施の手引(教職員用)』の「4. 試験・成績及び結果通知(3) 試験」における「3」不正行為」の中のレポートや論文などの剽窃盗用禁止並びに処分に関する文言を紹介。同時に、複数の大学の HP から入手した剽窃・盗用を禁じる公文書や防止のための論文指導文書も紹介し、適切な論文指導や論文執筆について議論させました。

研究者の論文ねつ造・改ざん問題が取りざたされる昨今、論文指導は全学教育から大学院教育までの最重要倫理課題でしょう。本分科会では、大学教員が教育と研究という両輪をととして果たすべき役割を、「論文」をキーワードに TA を対象にした FD の PFF (Preparing Future Faculty) で実施しました。

(瀬名波 栄潤)

E 情報学

情報学では、1 年生約 2600 人を 20 人程度の小グループに分け、TA (もしくは非常勤講師) が、指導を行います。50 名超の TA を有する科目であり、各 TA が、担当学生に対して、課題の目的や手順など、明確な指示を発する必要があります。分かりやすい説明ができるよう、事前に授業内容を確認し、わからない事項があれば、TA の質問対応に備えている S タイプの TA に質問対應用掲示板から質問を

することにしております。

本分科会では、初めて情報学を担当する TA、また、新たに S タイプの TA として勤務する TA、その他、経験のある TA や非常勤講師が一同に介し、本年度の情報学 I の目標、内容、指導体制、教材、成績評価の概略の説明と具体的な評価項目の説明を行いました。また、ELMS を使った授業課題の設定方法の研修を行いました。

情報学では、反転学習などの新しい教育手法を随時取り入れています。本年度は、特に学習教材を制作するグループ学習の際に、単純に成果物を提出するだけではなく、当該成果物を理解しているか否かを判断する設問を学生自身に生成させるといった取り組みを行う予定であることを参加者に伝え、そのような学習項目で特記すべき事項についての説明を行いました。

昨年までの特徴的なトラブル事例を述べ、対応策、および公平な成績評価のあり方と、具体的な評価体系の説明を行いました。情報学では、140 もの多数のグループが統一カリキュラムで授業を進行していきます。そのような統一カリキュラムを行うことによる優位性と、公平性を担保することの重要性などの担当者の心構えにも触れました。

TA の指導力育成にもつながる本科目での TA 経験がより良いものになるように、TA 全員が主体的に授業に関わっていただく予定です。なお、本 TA 研修会は、大学院共通科目「情報学教育特論」の講義を兼ねています。(布施 泉)

F 英語 II オンライン授業

分科会 F は、午後 1 時より 4 時過ぎまで研修を行いました。今年度英語 II を担当する TA14 名のうち、12 名が参加しました。(残る 2 名に関しては、後日補講を実施予定。)

前半は情報教育館 CALL 教室にて、英語 II の業務一般や TA としての心構えについてのレクチャーと、授業で使用する教材サーバーの操作練習。後半は全学教務と準備室を経由しつつ CALL110 教室に場所を移して、先輩 TA によるデモンストレーションと、授業中に起こりうる状況を想定しながら新人 TA・先輩 TA を交えてのディスカッションを行いました。先輩 TA が具体例を交えながら新人 TA にアドバイスする様子が見受けられ、業務の理解を深

めるのに役立っただけでなく、TA 同士の交流の場としても効果的だったようです。例年の通り、今回も先輩 TA に大いに活躍していただいた研修会でした。(原田 真見)

G 英語 II 以外の英語授業

英語 II 以外の英語の授業を担当する TA のための分科会は、午後 1 時半より国際広報メディア・観光学院会議室 407 で行われました。英語 II 以外の英語の授業については、業務内容が授業担当教員の方針により千差万別であるため、全体に関係すると思われる大まかな説明・案内を中心としました。まず、参加者には自己紹介をお願いし、所属と TA 経験の有無・経験の内容を述べてもらいました。その間に出席簿を回しましたが、分科会担当者が把握していたのは外国語教育センターが出す英語授業の TA のみであり、他部局が出す授業の TA が何名かいたため、そのグループには担当者が用意した、授業で使用する教室の資料は無用でした。次に、全学教育事務に全員を案内し、レポートボックス、帳簿や視聴覚機器の鍵の場所、機材の借り方などを確認してもらい、続いて全学教育スタッフ室にも案内しました。407 会議室に戻り、アンケートと名札の回収、個別の質問への対応をして、分科会を終了しました。(土田映子)

H 初習外国語(中国語以外)

最初に TA の担当外国語・授業科目の確認をしました。独語と仏語の CALL 必修授業担当者には、9 月に開催される講習会への出席が不可欠である旨を伝えました。

次に外国語 TA が一般に気をつけておかなければならない注意事項を説明しました。服装や立ち居振る舞いの注意点、教室内では常に学生に見られていることを意識し、不適切なふるまいをしないこと。必修 CALL の TA に対しては、教員のいない自学自習の監督における要領等です。担当教員との連絡を欠かさないこと、メールでの連絡の注意点を指摘しました。

最後に担当教員と問題が生じた場合の連絡先について説明しました。(西村 龍一)

I 中国語

中国語分科会は4月4日13時半～14時半に、メディア・コミュニケーション棟608室で行われました。中国語TA40名以上が参加し、ほかに中国語担当教員の参加もありました。分科会の内容は、まず、北海道大学全学教育における外国語の位置づけと中国語TAの役割について述べた後、中国語授業カリキュラムや中国語TAの一般的職務内容について説明しました。中国語TAの特色は留学生が大多数を占めるという点にあります。引き続き、教員とのコミュニケーション、学生との接し方や教室でのふるまいなど、これまでの事例をふまえつつ、気をつけるべき点について説明しました。その後、アンケート用紙、名札を回収し、一部TAは個別の教員との打ち合わせも行いました。「教員チームの一員」たる自覚を持ってもらうための有意義な分科会になったと考えます。(長井 裕子)

J 文系基礎科目

この分科会は参加者5名で、講師が「ティーチング・アシスタント・マニュアル」の該当箇所を具体的に説明し、それに基づいてディスカッションを行うという形で進めました。各学問領域によって学律の異なること、教師であるTAとしての倫理、個人情報守秘、公平な態度、ハラスメントの防止等のテーマについて、講師も含めて率直な意見交換を行い、TAの役割についての理解を深めることができましたと思います。(渡邊 誠)

K 心理学実験

本分科会の参加者は3名でした。ティーチング・アシスタント・マニュアルを輪読しながら、TAの心構え、実験授業の補助として求められること、心理学実験におけるTAの役割、特に注意すべきこと、等について質疑応答を交ぜながら説明を行いました。最後に、この実験授業でTAが直面するかもしれない幾つかの問題に対して、TAがどのように対応すべきかについて討論しました。分科会に参加した学生はいずれも熱心に討議に加わりましたので、実際の授業でどのような問題に直面する可能性があるのか、またそういう場合に自分がどういう風に行動したらよいのか、等を考えるよい機会になったと思います。(田山 忠行)

L 理系基礎科目

前半はミニレクチャー「グループ学習の基礎」(分科会C〈講義〉と合同)に参加し、講義におけるTAの役割について受講しました。後半は、理系大人数講義の特徴、理系講義における技術(黒板、プロジェクタ、レーザーポインタなどの使い方)について受講しました。また、総合教育における北大理系1年生のメンタリティについての特徴や注意事項に関する説明を受けました。その後担当科目別に分かれ、学生としてTAと接した経験、教育実習における経験などを参考に、理系講義TAのあるべき姿についてグループ討論を行いました。参加者は、より良いTA業務に向けた前向きな考えを持つことができたと思います。(野寄 龍介)

M 自然科学実験

まずN302室においてカテゴリー(物理学、化学、生物学、地球惑星科学)共通のプログラムを行いました。すなわち、自然科学実験の概要、TAとしての仕事内容と一般的な心構え、各実験共通の安全上の注意点などについて、スライドを用いた説明を行いました。次いで14:15より16:00まで、各カテゴリーに分かれ、カテゴリー別の実験の詳細やシステムに関する説明、ならびに安全教育を行いました。(沢田 健)

N 体育学

TA研修会における体育学の分科会は本年度より開講され、4月2日の13時30分より行われました。最初の45分程度はE205教室において、これまでの学校体育で起こった事故の例を紹介しながら、体育教員として第一に考えなければならない安全について講義を持ちました。その後体育館に移動し、主にトレーニングルームにおいて具体的に危険が予測される器具の置き方や行動について実技を含めながら行われました。最後に、実務的な内容の説明を行い、質疑も含め予定時間内に終えることができました。本年度初めての試みではありましたが、今後も続けていくべきだとの声を受講生からもあがっており、充実した分科会となりました。(瀧澤 一騎)

O アカデミックサポート

この分科会は、アカデミック・サポートセンターが実施する学習サポートのチューター（TA）を対象に行われたものです。学習サポートチューターは業務内容が通常の TA と異なり学生と個別対応するという形のものであるため、科目の専門的内容のみならず、説明能力やコミュニケーション能力が特に重要になります。その観点から、自己紹介や質疑応答、ディスカッション、模擬対応などの双方向的内容を重視した研修を実施しました。新規採用者 2 名（2 名中）と、昨年度から引き続いて担当するチューター 6 名（9 名中）の、合わせて 8 名が参加しました。他にアカデミック・サポートセンターのスタッフが参加し、特にスタッフの清水が場を取り仕切る役目を担いました。

始めにアイスブレイキングを兼ねて、新規採用者は自己紹介を、チューターを継続して行う者はペアになって相手を紹介する他己紹介を行いました。次いで全員で意見を交わす形で、学習サポートの内容や意義、対応の際の注意点などをディスカッションしました。チューターは、正課外で学生と個別型・単独型の対応を行い、学生の主体性を重視しての対応が必要になるなど、いろいろと難しい点もあります。その際の注意点や心得、正課の内容に沿った具体的指導方法などについて、先輩チューターやスタッフの体験談・心境なども交えてアイディアを共有しました。新規採用者からも多くの質問や意見が出て、活発な内容となりました。参加したチューターは、実際に勤務を行う上での心構えができたのではないかと思います。（清水 将英）

学生主体型授業をめざして ～第 24 回北海道大学教育ワークショップ～

6 月 13 ～ 14 日、北広島クラッセホテルで第 24 回北海道大学教育ワークショップを開催しました。学内の 37 名の教員らが参加しました。

今回のテーマは「学生主体型授業をめざして」です。学生が自ら学ぶ授業にするには、どのように授業を計画すればよいのか、そして実際にどのような授業になるのかをシラバスの作成と模擬授業を通して体験しました（表 2）。

各グループに新たな授業を発案してもらう形でワークショップが進められますが、まず授業題目が魅力的でなければ、それ以降のシラバスは学生に読んでももらえません。また、授業の目標が習得する価値がなければ、学生の積極性は引き出せません。そして、学生が自ら学ぶ形になるよう方略を練らなければ、単に受身的な学習になり、単位を取ったらずくに内容を忘れることになるでしょう。

このようなことを念頭に 5 つのグループが討論

を重ね、学生主体型授業を構成しました。そして、実際に模擬授業を行いました。各グループは参加者を学生に見立ててクラス全体を巻き込むような授業を展開し、大変盛り上がりました（写真 5）。

高等教育研究部の部門が改編され、教員研修担当チームも新しいメンバーになりました。これに伴い、本研修会の改革も始まりました。今回は、外部講師として山形大学の小田隆治教授（写真 6）と北大の TA 経験者である稲葉一輝氏を招き、学生主体型授業の内容を紹介して頂きました。また、従来はシラバスの作成に終始していましたが、初めて模擬授業として実践を入れてみました。

今回は、内容の改革に関して準備不足もあり、多くの問題点もありました。参加者の皆様からいただいたフィードバックを活かし、有意義な研修会を目指して参りたいと思います。（山田 邦雅）

表2 第24回北海道大学教育ワークショッププログラム

2014年6月13日(金)

8:30 受付開始 情報教育館 3F スタジオ型中講義室
 8:45 挨拶 新田副学長
 9:00 バス出発 オリエンテーション FDの意味, 自己紹介
 10:00 北広島クラッセホテル到着, 玄関前で記念写真
 10:05 レクチャー「学生主体型授業の挑戦」
 10:50 休憩
 11:00 レクチャー「講義題目・目標の設定～なぜ目標は具体的でなければならないのか～」
 11:30 グループ討論「講義題目・目標の設定」
 12:15 昼食
 13:00 中間発表「講義題目・目標の設定」
 13:25 リフレクション作業「講義題目・目標の設定」
 13:55 最終発表・全体討論「講義題目・目標の設定」
 14:20 授業に関するQ & A
 14:40 休憩
 14:50 レクチャー「学生主体型授業を進めるために～学習(授業)方略と学習評価～」
 15:20 グループ討論「授業方略と教育評価」
 16:10 中間発表「授業方略と教育評価」
 16:55 休憩
 17:05 リフレクション作業「授業方略と教育評価」
 17:35 最終発表・全体討論「授業方略と教育評価」
 18:05 夕食
 18:50 「蛙学への招待」への招待～学生から見た究極の授業とは～
 19:20 「模擬授業のために」
 19:30 模擬授業の構成作業①
 20:30 懇親会

2014年6月14日(土)

7:30 朝食
 8:30 模擬授業の構成作業②
 9:30 模擬授業の実践①
 10:45 休憩
 10:55 模擬授業の実践②
 11:45 レクチャー「教育倫理」
 11:55 修了証書授与式
 12:00 バス出発 参加者・世話人の感想



写真5 模擬授業の様子

写真6 山形大学小田隆治教授のレクチャー

教育評価 EDUCATIONAL EVALUATION

「IR ネットワーク報告書 2013」を発行しました

『高等教育機関において、「IR (Institutional Research)」というキーワードが広まりつつあります』と書き出した記事が、昨年同時期のニュースレター No.95 にあります。その後、約1年が経過し、IR というキーワードは“急速に”広まり、略称を説明する機会が減ってきたように感じています。念のため簡単に説明しますと、IR は、高等教育機関の教育・研究、学生支援、経営等の改善や改革に生かすことを目的に、学内の様々なデータ（学生・研究・財務）を収集、蓄積、分析する調査・研究活動です。我々 IR ネットワーク推進室では、文部科学省大学間連携共同教育推進事業「教学評価体制（IR ネットワーク）による学士課程教育の質保証」により、IR の推進に取り組んでいます。

平成25年3月に、学生調査の結果、卒業生調査、英語力調査の結果を加えて3部構成とした「IR ネットワーク報告書 2013」を発行しました（図1）。また同時に、本学と連携する8大学の相互評価に関する『「学生調査2012年」のデータを用いた比較分析報告書—北海道大学と連携大学との相互評価—』を発行しました（図2）。以下、それぞれの調査結果を簡単に紹介します。

本事業における学生調査は2回目になり、8大学すべての調査結果が揃った調査は今回が初めてとなります。データは、1年生調査、上級生調査ともに1万件を超えました。1年目と2年目の基礎集計の結果を概観すると、年度による目立った差異がないことがわかります。本学生調査の結果が、近年の大学生像を捉えているものと考えられます。また、多くの質問項目において、肯定的回答の割合は女性の方が高い傾向が示されています。女性が、学内、学外に限らず、様々な活動に積極的に臨み、時間も効率的に使っている様子がうかがえます。友人や教員との人間関係についても女性の適応感、満足度が高いようです。

卒業生調査は、大学教育を通じて身につける能力と社会で求められる能力のミスマッチを検証するこ

とを目的として、2大学において試験的に実施されました。地域、設置形態が異なる2大学で調査が行われましたが、大学間の比較をみると、調査結果に多くの類似した傾向がみられるという興味深い結果が得られています。

英語力調査は、他2つの報告と比べると、英語力評価に関する専門的な内容になっています。大学における汎用性のある英語能力評価体制の確立を目指し、上記の学生調査における学生の自己評価結果とTOEICなどの英語能力テスト結果を用い、国際基準に沿った技能（読む、書く、聞く、話す）別の英語力評価基準の整備を進めています。

最後に、本学と連携大学との相互評価の結果を紹介します。本学の特徴として、初年次教育の充実や学生の授業外学習時間の増加が挙げられ、総合入試、総合教育部導入の好影響が出ている可能性があります。一方で、取りたい授業を履修できなかったと回答する学生も多く、引き続き経年変化に注視したいと考えています。

今後、このニュースレターで詳細な分析結果を紹介していきます。なお、両報告書は、ウェブサイト (<http://8gp.high.hokudai.ac.jp/>) 上でご覧いただけます。（宮本 淳・徳井 美智代）

図1 IR ネットワーク報告書 2013 表紙

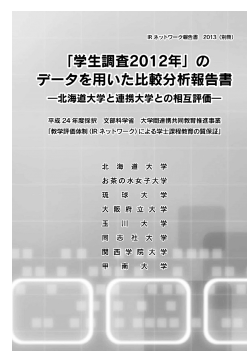


図2 「学生調査2012年」のデータを用いた比較分析報告書—北海道大学と連携大学との相互評価— 表紙

地域社会連携 Community Relations

公開講座「アドバンスドランニング講習(1期)」を開催しました

5月15日より6月26日まで、隔週木曜日に市民ランナー対象のランニング講習会が北海道大学陸上競技場にて行われました。この公開講座は、フルマラソンで好タイムを目指す市民ランナーを対象に、陸上競技部の学生がペースメーカーをつとめて、一人ではなかなかできない高強度のトレーニングを行うものです。1期目は20名の参加があり、天候や気温が心配された日もありましたが無事当初スケジュールを消化することができました。参加者も充実したトレーニングになったようです。

今後7月～8月に2期、9月～10月に3期が開

催されます。

(瀧澤 一騎)



写真8 練習後の様子

小学生対象のかけっこ教室「未来のアスリート目指して」開催

5月10日(土)に、北海道大学陸上競技場において北海道大学公開講座「未来のアスリート目指して」が開催されました。この公開講座は4年前より開催しており、小学校の運動会が集中する5月末～6月上旬を前に、かけっこで速く走るコツを小学生低学年対象に教えています。この時期の恒例行事になっており、募集開始から申し込みが殺到し、50名の定員に対して100名を超す応募がありました。そこで、急遽補助の学生を増やして68名で行いました。

当日は天候にも恵まれ、ウォーミングアップとしての鬼ごっこに始まり、走り方の講習、スタートの

練習などを行い、最後には補助学生も加わって全員でリレーを行いました。陸上競技部員の補助も適切に行われ、「速くなった!」との声も聞かれました。また、いくつかの報道機関によりニュースや新聞紙上において報道され、社会的にも注目度の高いことがうかがえました。

例年、参加希望の方をすべて受け入れられないことが課題となっており、次年度以降は回数を増やすことや新たな形での公開講座として発展させることも視野に入れて継続したいと考えています。

(瀧澤 一騎)

写真9 学生による指導風景

写真10 リレーのスタート

学生支援 STUDENT SUPPORT

平成 26 年度全学インターンシップ始まる

平成 26 年度の全学インターンシップがスタートしました。現在、夏休みの実習に向けて、説明会、学生と企業の希望のマッチング、事前研修などを行っています。

4 月 14 日及び 16 日に「平成 26 年度全学インターンシップ説明会」を開催し、両日に全学の学部生、大学院生約 524 名の参加がありました。なお、14 日は、インターネット回線を活用し、函館キャンパスとも双方向の説明会としました（参加者 27 名）。

今年度の説明会においては、昨年度に全学インターンシップに参加した学生からそれぞれ体験談を発表していただき、今年度の参加希望者に対する参加意欲の向上を図りました。その後、全学インターンシップの担当者である、亀野及びキャリアセンター高橋インターンシップマネージャーから制度の説明や具体的な手続きの説明がありました。その結果、学部生 341 名、大学院生 219 名、計 560 名の参加申込みがありました（表 3）。また、参加目的をみると、「就職希望である業種の実情を知りたい」

が最も多く 38.5%，次いで、「自分がどういう職業や業種に向いているのかを選択するための経験として」（17.2%）、「社会人として「働く」ということはどのようなことなのかを知りたい」（14.5%）となっています（図 3）。

その後、5～6 月にかけて、参加希望学生と企業等のマッチングを行い、7 月 1 日現在 179 名の参加が決定しています。なお、今年度より新渡戸カレッジの学生 10 名も参加します。参加が決まった学生に対しては 7 月 1 日、4 日、8 日、11 日に講義形式の事前研修を実施し（函館キャンパスでは別途実施予定）、企業研究や本インターンシップで検証する仮説の設定などを行います。その後、1 名 10 分あたりの個人面談も実施しています。これらの事前研修、個人面談はインターンシップ実習の効果がより高まるよう実施しているものであり、これらを経て、参加学生はそれぞれの企業・団体で夏期休暇にインターンシップ実習を行う予定です。（亀野 淳）

表 3 平成 26 年度 全学インターンシップ参加申込状況

平成 26 年 6 月 6 日現在

学年 学部	1 年	2 年	3 年	4 年以上	計
文学部	0	6	32	5	43
教育学部	0	1	7	0	8
法学部	3	8	34	1	46
経済学部	0	16	70	3	89
理学部	0	4	12	2	18
医学部	0	0	1	1	2
薬学部	0	2	1	1	4
工学部	3	8	43	4	58
農学部	0	10	30	10	50
獣医学部	0	0	0	2	2
水産学部	1	4	11	1	17
総合教育部	4	0	0	0	4
計	11	59	241	30	341

課程・学年 研究科・学院	修士 1 年	修士 2 年	博士	計
文学研究科	3	1	0	4
教育学院	2	1	0	3
経済学研究科	1	1	0	2
理学院	7	0	0	7
医学研究科	1	0	0	1
工学院	97	2	0	99
農学院	35	0	0	35
水産科学院	2	0	0	2
国際広報メディア・観光学院	2	0	0	2
情報科学研究科	15	0	1	16
環境科学院	16	0	0	16
生命科学院	12	0	0	12
総合化学院	17	0	0	17
公共政策学教育部	3	0	0	3
計	213	5	1	219

（注）高等教育推進機構・キャリアセンターが中心となり全学的に実施する「全学インターンシップ」の数字のみであり、原則として各学部・研究科・学院などが独自に実施するものは含まない。ただし、CEED 分等は含む。

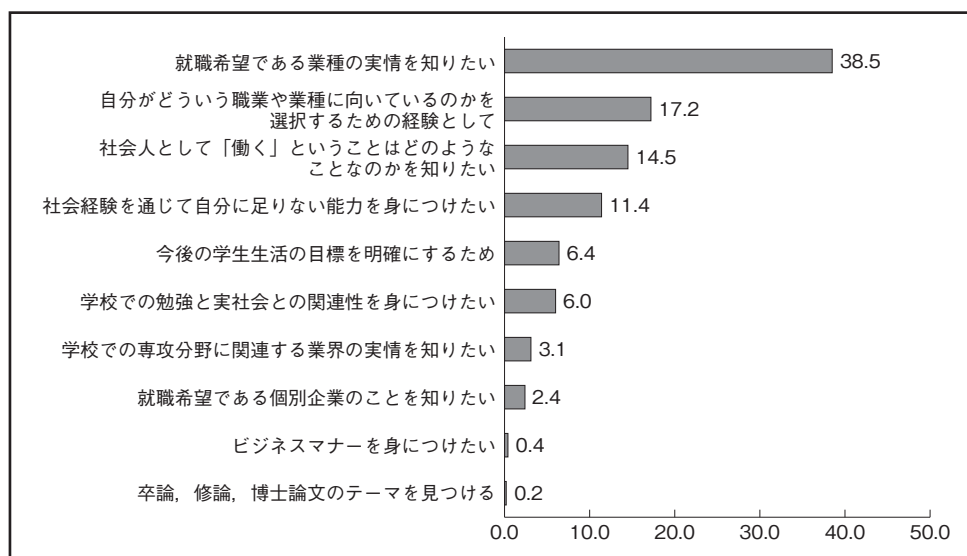


図3 インターンシップの参加目的

(注) 第1位のみ集計

特別講義「キャリアデザイン」開講

全学教育の特別講義「キャリアデザイン」を開講しています。

本講義は、平成6年度より学部1年生を対象としたキャリア教育の一環として開講しています。入学後のできるだけ早期に自らのキャリアを考えるきっかけを与え、自らの目標に向かって前向きに勉学することを促すことを目的に、社会の第一線で活躍している方々の学生生活から現在に至るまでの体験談、キャリア形成についての講義、グループでのディスカッションなどを通じて、大学で「学ぶこと」と社会で「働くこと」の意義や関連性を考え、今後の自らのキャリアを考えるきっかけとすることができるようになっています。

今年度は、1年生を中心に36人が受講しており。表1のとおり、担当教員の講義のほか、小柴キャリアセンター長の講義、さらには、外部講師として、末吉孝弘氏（株式会社東急ホテルズ 運営部長）、木下勝寿氏（株式会社北の達人コーポレーション代表取締役）、吉村美紀氏（セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 政策提言オフィサー）の3人をお招きし、お話をいただきました。

また、グループワークも実施しており、「○○として活躍するために必要なこと」(○○には各グルー

プで選択した職業が入ります) というテーマで調査やインタビューなどを実施し、プレゼンテーションを行うこととしています。

さらに、今年度より自己分析の一環としてPROG (Progress Report on Generic Skills) を実施し、学生のコンピテンシーとリテラシーを定量的に測定しています。この測定結果を学生自身に返却し、今後の学生生活の目標設定の参考にしてもらうとともに、学生生活との関連性について検討する予定です。

(亀野 淳)

写真11 グループワークの様子

表 4 2014 (平成 26) 年度 キャリアデザイン スケジュール

① 4 月 10 日 (木)	○本科目の内容, 目的など
② 4 月 17 日 (木)	○キャリア概論Ⅰ (亀野)
③ 4 月 24 日 (木)	○PROG の実施
④ 5 月 1 日 (木)	○キャリア概論Ⅱ (亀野)
⑤ 5 月 8 日 (木)	○キャリア概論Ⅲ (小柴キャリアセンター長)
⑥ 5 月 15 日 (木)	○PROG の結果返却, 説明
⑦ 5 月 22 日 (木)	○今後の進め方について ○外部講師による講義やグループワークについて ○グループワークⅠ: グループの編成分け, 討論開始
⑧ 5 月 29 日 (木)	○グループワークⅡ: 調査及び討論
⑨ 6 月 12 日 (木)	○外部講師Ⅰ: 末吉孝弘氏 (株式会社東急ホテルズ 運営部長) 「日々は全力—知る機会が人生を変えた—」
⑩ 6 月 19 日 (木)	○グループワークⅢ: 調査及び討論
⑪ 6 月 23 日 (月)	○グループワークⅣ: 調査及び討論
⑫ 6 月 26 日 (木)	○外部講師Ⅱ: 木下勝寿氏 (株式会社北の達人コーポレーション 代表取締役) 「起業家のキャリアデザイン」
⑬ 7 月 3 日 (木)	○グループ発表
⑭ 7 月 10 日 (木)	○外部講師Ⅲ: 吉村美紀氏 (セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 政策提言オフィサー)
⑮ 7 月 17 日 (木)	○全体のまとめ ○PROG の実施 など

※スケジュールは, 外部講師の都合等により変更の可能性あり

2013 年度スポーツトレーニングセンター利用状況

2013 年度の利用者数集計作業が終わり, 年間合計で延べ 24,000 人弱の利用があったことが明らかになりました (下表)。

2009 年は 16,198 人の利用に留まっていたましたが, 2010 年は 24,695 人と 1988 年以来 22 年ぶりに年間利用者が 2 万人を超えました。以降も利用者は増加し, 2011 年度は初めて延べ 30,000 人超え, そして 2012 年度は 33,000 人を超える利用者がありましたが, 2013 年度は 3 年振りに 3 万人を割り込みました。これは, 耐震補強工事のために 10 月 1 日より 2 月 7 日まで閉館していたことが影響していたと考えられます。4 月～9 月末日までは前年比 116%の利用者があり, 3 月も前年比 114%の利用

者数であったため, 工事がなければ概ね 115%程度の増加になったと予想されます。

平日は朝 7 時からの早朝開場を実施しており, 授業時間前にも積極的にご利用下さい。また, 2010 年よりスポーツトレーニングセンターの facebook ページを開設しています (<https://www.facebook.com/HokkaidoUniversitySportsTrainingCenter/>)。授業予定や占有利用, 開館時間の案内, 臨時休館の連絡などを中心に, 利用者数や機器情報についても掲載しています。ホームページ (<http://life1.high.hokudai.ac.jp/sports/>) とあわせてご覧下さい。
(瀧澤 一騎)

表 5 2013 年度におけるスポーツトレーニングセンター利用者数

期間	内訳	2013 年度	2012 年度	2013 年度 / 2012 年度比
小計	サークル・クラブ団体	15,312	24,753	－ 9,441 (62%)
	個人利用学生	8,215	8,444	－ 229 (97%)
	教職員	326	682	－ 356 (48%)
合計	－	23,853	33,879	－ 10,026 (70%)

体育会所属クラブに留学生に関する調査を実施しました

留学生と体育会の部活動をつなぐ前段階として、現在またはこれまでに留学生の部員はいたかを確認するとともに、留学生が入部することで困ったこと・困りそうなことを調べるために体育会所属クラブを対象に調査を実施しました。

結果として、現在約 1/4 の部に留学生が所属しており、過去にいた部も合わせると半数以上の部になることが分かりました。また、ほぼ全ての部で留学生の受け入れは可能と回答しています（明確に受け入れ困難としたのは2つの部のみ）。ただ、留学生の入部に関しての不安についての記述を見ると、コミュニケーションについての言語的問題や「部活動」の概念の理解について不安を抱いている部が多いようです。「部活動」の概念の違いによってこれまでにトラブルが起きた部もあることもわかり、留学生全体に対して体育会部活動について何らかの説明機会があるほうが良いと思われました。

スポーツは文化や国籍を超えた交流を可能とします。また、運動習慣のある学生は運動習慣のない学生と比べて成績が良いとする論文は海外を中心に多数報告されています。これからも部と留学生双方のサポートを行い、学生同士がスポーツを通じて相互理解し健康的な生活を送ることができるような活動を続けていきます。

(瀧澤 一騎)

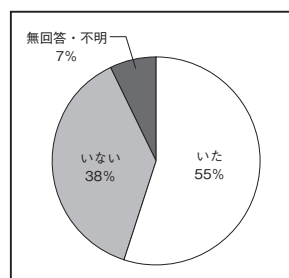


図4 これまでに留学生の部員はいたか？

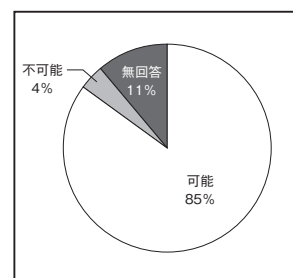


図5 留学生部員の受け入れは可能か？

「食べて勝つプロジェクト」栄養講習会・第一回が開かれました

6月12日(木)と6月16日(月)に、生協食堂(12日は北部、16日は中央)において「食べて勝つプロジェクト」栄養講習会が開かれました。この栄養講習会は4年前よりスポーツトレーニングセンター主催で開催されており、株式会社明治と北海道大学生協の協力のもと行われています。一般的なスポーツ栄養講習会での内容は、学生の金銭感覚では持続することが難しいため、学生調査などから得られた食費などをもとに「現実的」で「持続可能」な食事方法を実践できるようにする講習を行ってきました。

今回の講習会では、前半を株式会社明治で管理栄養士の資格を持つ谷田様より基礎的なスポーツ栄養の説明があり、後半は北海道大学生協中央食堂の佐藤様が生協食堂を利用した運動選手向けの食事選択について説明されました。体育会所属クラブの部員をはじめとして、12日は20名程度、16日は70名程度の参加者がありました。講習会終了後に質問に来る学生もみられ、関心が高いことがうかがえました。

今年度は7月に第二回、秋に第三回と第四回の講習を予定しています。第二回は試合期の食事や給水について、第三回と第四回は身体づくりのための栄養摂取について講習を行う予定です。食事・栄養はスポーツ選手のパフォーマンス向上のみならず、一般の方にとっても生活習慣病予防に重要な要素となります。興味のある方はこれからの講習会に一度お越しください。

(瀧澤 一騎)

新任紹介 INTRODUCTION OF NEW STAFF

Greetings from a New Visiting Professor

Fernando Cornet, Professor
University of Granada

Since I will have the pleasure to visit Hokkaido University this summer I have been asked by Prof. Hosokawa to write a few lines introducing myself. This is always a difficult task, but I'll try to do my best.

I am currently professor of theoretical physics and head of the theoretical physics and physics of the cosmos department at the University of Granada, in the south of Spain. My main research topic since I started my Ph. D has been on Phenomenology of High Energy Physics, but since 2001, when I was appointed as the spanish representative in the physics group of the TUNING project, I have been involved in many Spanish and European activities concerning physics education problems.

At the Spanish level I should mention that I was the chairman of a committee formed by representatives of all the Spanish universities with the mandate of presenting our government with a new design of the physics bachelor according to the Bologna Process. Currently, I participate in the European Network HOPE, where I am co-chairman (together with Prof. Eamonn Cunningham, from the University of Dublin, Ireland) of working group 3: improvements in physics teaching — meeting future global challenges in physics higher education.

着任のご挨拶

高等教育推進機構大学院教育部新渡戸スクール準備室 特任教授 今井 太志

4月1日付けで北海道庁から派遣され、新渡戸スクール準備室に特任教授として採用されました今井太志と申します。北海道庁から北海道大学への職員派遣というのは、これまであまり例がないことかと思いますが、どちらも北海道にとっては重要な組織であり、両者の連携が深まることが、ひいては北海道のため、日本のため、世界のためになると考え、両者の架け橋となるよう取り組んでまいります。

私は、もともととは総務省（旧自治省）に採用され、地方自治・地方財政に関連した業務に携わってききましたが、平成15年度からは北海道庁で勤務しており、そうした分野以外にも、IT、観光、職業訓練な

どを担当してきました。

これまでの道庁勤務の中でも、数多くの北大の先生に様々なご示唆、ご協力をいただいてまいりました。この場をお借りして、改めて北大の皆様方にお礼を申し上げたいと思います。

私が担当している新渡戸スクールは、平成27年4月の開講を目指して準備が進められている大学院生向けのプログラムです。全学52専攻全ての大学院生を対象に、国際通用性のある真の国際人の育成

を図ってまいりたいと考えており、今年5月13日には第1回の設置準備委員会が正式に開催され、現在、着々と準備が進められております。

最近、グローバル人材という言葉がはやり言葉のようにいろいろな場面で使われておりますが、真の国際人とはいったいどのような人材でしょうか。新渡戸スクールでは、高度な専門能力を持ち、常に自己能力向上を怠らず、イノベティブなチームを創造・運営して、社会に新たな付加価値を生み出し続ける人材と考えます。全ての分野において日々複雑化多様化の進む現代においては、このような人材こそが、国際学会での議論をリードし、また、国際共同研究をコーディネートし、そして、世界の中で多様な能力を持った人達とともに、世界の課題解決に

貢献するイノベーションを生み出していくことでしょう。新渡戸スクールでは、全学の教職員と協力して、一人でも多くの学生が真の国際人へと成長する機会となるよう取り組んでまいります。

個人的には、最近、ブームにのって、マラソンやトレイルランニングを始めてしまいました。北大のキャンパスは、働くのみならず走るという点でも最高の環境です。これからますます季節が良くなってきます。日々濃くなる緑を堪能しながら、ゆったりと構内のジョギングも楽しんでいきたいと思っております。

皆様、これから北大のメンバーの一人として、どうぞよろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

高等教育推進機構大学院教育部新渡戸スクール準備室 特任准教授 島村 道代

2014年2月17日付で大学院教育部新渡戸スクール準備室に特任准教授として着任いたしました、島村道代と申します。以前は、本学・地球環境科学研究院／大学院環境科学院にて、部局全体の教育研究活動の実績評価・戦略作成、大型外部資金獲得の申請等を担当する特任准教授を務めておりました。そのなかで、平成25年度博士課程リーディングプログラム・オールラウンド型への申請に際し、プログラムを統括するコーディネーターの補佐をさせていただきまして、既採択校の申請内容分析、各種情報収集、総務部企画課等と連携した北海道大学全大学院の研究教育実績の集計、連携先機関である（独）産業技術総合研究所との橋渡しを行わせていただきました。この申請が、2015年4月開講予定の北海道大学全52専攻の大学院生を対象とした全学プログラム「新渡戸スクール」の原型となり、その御縁で、この度、専任スタッフとなりました。

新渡戸スクールでは、各大学院で養成される高度な専門性にプラスして、大学院修了者が活躍する上で必要となる能力を養成する、分野横断型グローバル人材育成プログラムを実施していきます。本プログラムでは、学生が獲得すべき能力を「3＋1の力」と呼んでおり、能力更新力・組織形成力・社会還元

力＋専門家倫理と定義しています。これは中教審答申にもありました通り、「21世紀は知識基盤社会」であり、大学院を修了した高度人材には、個々人が専門的な素養・能力を備えた上で、異なる知識・方法論を持つ多種多様な人材をチームとして機能させることが期待されていることとも対応しています。

そこでスクールでは、修士・博士の課程レベルに合わせた課題解決型のプロジェクトと、これを行うための手法を学ぶTBL／PBLを多用したコースワークで「3＋1の力」を養成していきます。また年次進行とあわせ、まず2015年4月に修士課程、2017年4月からは博士課程の学生を受け入れる予定です。全学から様々な専門や国籍・文化を持った、個性豊かでフロンティア精神あふれる“北大らしい学生さん達”が集い、成長する場を作っていけたらと思っています。

さて終わりに私自身を振り返れば、専門は地球環境科学、特に天然試料の化学分析を行って過去を環境を復元する“古環境学”と呼ばれる研究で、地球温暖化の評価などを海外研究機関・国内の大学および独立行政法人で行ってきました。また前職で、大学院講義を担当させていただいてはありましたが、

教育についてはまだまだ知らない事・分からない事が多い未熟者でありまして、高機構の諸先輩方から

日々、勉強して参りたいと考えております。みなさま、どうぞよろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

国立大学連携教育機構 特定専門職員 山本 堅一

4月1日付で国立大学連携教育機構に特定専門職員として着任いたしました山本堅一と申します。私は、本学の経済学研究科で学位を取得した後、従来から関心のあった高等教育開発（いわゆるFD）の分野に主たる研究対象を移しました。FDの分野で先進的な愛媛大学等において、ファカルティ・ディベロッパーの研修を受け、前任校ではFDの全般的な企画・実施を担当しておりました。

具体的には、客観的データに基づき授業をより良くするための支援を目的とした教員への授業コンサルティング（個人対象）や、シラバスのブラッシュアップ講座（教員陣対象）、3つのポリシーから見直すカリキュラム改善ワークショップ（学部・学科対象）等の実施、教員の取組みをまとめた授業改善ティップス集の制作等を行ってきました。

型にはめるような一方的な教育改善ではなく、普段から学生の教育に取り組まれている教員自らが解決策を見出せるような支援中心の教育改善をモットーとしております。さまざまな実践例、教育理論は用意しておきながらも、基本は各教員の教育理念と学部・学科のポリシーに沿った効果的な教育改善の支援に努めてまいりました。

昨年度、北海道内の国立大学が連携して教養教育の実施を行うという事業について知り、大変興味を持ち、この事業をお手伝いさせていただくため、本学に戻って参りました。大学間連携の重要性がますます高まっている現代において、道内の国立大学が双方向遠隔授業システムによって教養科目を相互に提供し合い、遠隔地の学生同士がリアルタイムに学び合うことで、教育の質も向上させていこうというねらいを持つこの事業は、高等教育開発を研究する私にとって大変やりがいのある仕事だと考えています。

私は、この事業において道内国立7大学の調整役を果たす連携教育機構に所属し、現在は後期の遠隔授業開始に向け、その準備を進めているところです。連携教育機構は高等教育推進機構内のN107に事務室を構えております。全学教育を担当される皆様には、ご協力いただくこともあると思いますので、皆様どうぞよろしくお願い申し上げます。

日誌 EVENTS, April-June

4 月

- 1 日 (会議: 持回り) 平成 26 年度高等教育推進機構運営委員会
- 2 日 (行事) 全学 TA 研修会
- 7 日 (行事) 新入生オリエンテーション, 総合教育部ガイダンス
- 8 日 (行事) 入学式
- 10 日 全学教育部 第 1 学期授業開始日
- 23 日 (会議) 平成 26 年度第 1 回教育改革室会議
- 25 日 (説明会) 進学相談会 (札幌)
- 28 日 (会議) 平成 26 年度第 1 回学生委員会

5 月

- 9 日 (会議) 平成 26 年度第 1 回新渡戸カレッジフェロー交流・研究会
- 9 日 (会議) 平成 26 年度第 1 回新渡戸カレッジ運営会議
- 10 日 (行事) 新渡戸カレッジ入校式
- 10 日～11 日 (行事) 新渡戸カレッジ学内合宿
- 13 日 (会議) 第 1 回新渡戸スクール設置準備委員会
- 16 日 (会議) 入学者選抜委員会
- 19 日 (会議) 第 73 回教務委員会

- 23 日 (説明会) 進学相談会 (札幌)
- 29 日 (説明会) 進学相談会 (札幌)
- 29 日～30 日 (会議) 平成 26 年度国立大学教養教育実施組織会議 (京都)

6 月

- 9 日 (会議) 第 2 回大学 IR コンソーシアム運営委員会 (TV)
- 11 日～19 日 (会議: 持回り) 平成 26 年度第 1 回高等教育推進機構学務委員会
- 13 日～14 日 (研修) 教育ワークショップ (北広島)
- 16 日 (会議) 平成 26 年度第 1 回卒業生調査研究委員会 (東京)
- 23 日 平成 26 年度 AO 入試・帰国子女入試学生募集要項公表
- 23 日 (説明会) 高校主催進学相談会 (札幌)
- 25 日 (会議) 平成 26 年度第 2 回教育改革室会議
- 26 日 (会議) 平成 26 年度第 1 回全学教育専門委員会
- 27 日 (会議) 全学教育科目責任者会議 (文系基礎科目)

行事予定 SCHEDULE, July-September

◆ 7 月

- 24 (木) 木曜日の授業終了日
- 25 (金) 金曜日の授業終了日
- 30 (水) 水曜日の授業終了日
- 31 (木) 火曜日の授業を行う日 (木曜日の授業は行わない)

◆ 8 月

- 1 (金) 初習外国語統一試験日 (通常授業は休講)
- 3 (日) ～4 (月) オープンキャンパス
- 4 (月) 月曜日の授業終了日
- 5 (火) 第 1 学期授業終了日
- 6 (水) ～9 月 25 日 (木) 夏季休業
- 13 (水) 成績報告締切 (非常勤 [帳票])
- 18 (月) 正午 成績報告締切 (常勤 [Web 入力])
- 25 (月) 平成 18 ～ 26 年度入学者の全学教育科目成績 Web 公開

- 25 (月) ～ 26 (火) 全学教育科目成績確認及び成績評価に関する申立て期間
- 25 (月) ～ 9 月 25 日 (木) 自由設計科目登録変更期間

◆ 9 月

- 上旬～中旬 学科等分属手続: 当該学部 (2 年次以上)
- 24 (水) 午後 学部・学科等移行ガイダンス
- 25 (木) 学部・学科等紹介
- 26 (金) 第 2 学期授業開始日
- 26 (金) ～ 10 月 2 日 (木) 学部・学科等移行手続き (予備志望調査)
- 26 (金) ～ 10 月 2 日 (木) 抽選科目の申込期間 [Web 入力]

ニュースレター 2014, No.99 目次

〈巻頭言〉 CoSTEP10 年目の節目にあたって 松王 政浩	1	平成 26 年度全学インターンシップ始まる	13
TA 研修会開催される ー226 名が修了ー	4	特別講義「キャリアデザイン」開講	14
学生主体型授業をめざして ー第 24 回北海道大学教育ワークショップー	8	2013 年度スポーツトレーニングセンター 利用状況	15
「IR ネットワーク報告書 2013」を 発行しました	11	体育会所属クラブに留学生に関する調査を 実施しました	16
公開講座「アドバンスドランニング講習 (1 期)」 を開催しました	12	「食べて勝つプロジェクト」栄養講習会・第一回が 開かれました	16
小学生対象のかけっこ教室 「未来のアスリート目指して」開催	12	新任紹介	17
		日誌	20
		行事予定	20
		目次・編集後記	21

編集後記

短い夏がやってきました。昼夜の温度差が大きく体調を崩しやすい時季ですので、皆さまくれぐれもお体ご自愛ください。

99 号は組織改編後初のニュースレターですので、気持ちを新たに編集に臨みました。今後とも皆さまにさまざまな情報提供・活動報告を行っていきたいと考えておりますので、ご意見・ご要望などありましたら、お気軽にご連絡ください。なお、次号は 100 号となりますので、ささやかながら記念号としての企画を計画中です。

(バックス)

ニュースレター

(北海道大学高等教育推進機構広報誌)
通算 第 99 号

発行日： 2014 年 7 月 30 日
発行元： 北海道大学高等教育推進機構
〒060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目
電話 (011) 706-7520, FAX (011) 706-7521
編集委員： ◎細川敏幸・木村純・鈴木誠・瀧澤一騎・飯田直弘
ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話 (011) 706-7514, FAX (011) 706-7521
インターネットホームページ：
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>